

2021年8月30日 17:23 www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202108301723301

アフガニスタンでの米国の屈辱的敗北ー学ぶべき教訓は何か

チャンドラ・ムザファール（マレーシア人権活動家）

Humiliating Defeat In Afghanistan

in World – by Dr Chandra Muzaffar – 28/08/2021



The mainstream Western media is full of news these days about people fleeing Kabul in the wake of the Taliban victory. Dramatic pictures of young and old scrambling to get on to jam-packed aeroplanes do make a huge impact. The message they convey is that a collective fear has gripped the Afghan people as they seek to escape the iron grip of an 'oppressive and brutal regime'. The images also suggest that freedom and security await these fleeing refugees in Western capitals.

欧米の主流メディアはこの数日、タリバンの勝利をうけてカブールから逃げ出そうとする人びとのニュースでいっぱいだ。若者も年寄りもわれ先にすしづめの飛行機に搭乗しようとする劇的な映像は、確かに大きな衝撃をもたらす。映像が伝えるメッセージは、アフガンの人びとが集団的恐怖にとらわれ、「抑圧的で残忍な体制」の冷酷な支配から逃れようとしているというものである。映像はまた、自由と安全が欧米の首都でこれらの逃亡難民を待ち受けていることを暗示している。

多くの人々、これらの映像がもうひとつの気の遠くなるような現実、つまり20年間にわたるア

フガニスタン占領の果てに米国とその同盟諸国が被った屈辱的な敗北から注意をそらす役割をしていることに気づかない。ブラウン大学の戦争のコスト・プロジェクトによると、それは、2.26兆米ドルを食い尽くす占領だった。最大時には、それによって77万5000人の米国の軍務要員が雇用された。米国と北太西洋条約機構（NATO）は、その指揮下に世界で最も殺傷力のある先端武器を配備していた。それでも、2322人ほどの米軍の死者が出た。アフガニスタン

とパキスタンにおける米国とNATOの軍事作戦の結果、24万人の死者が記録された。アフガン民間人の死者は4万7245人と推定され、パキスタン民間人の死者は2万4099人に達した。2020年末には350万人のアフガン人が国内避難民となり、250万人のアフガン難民がいた。

対照的に、タリバンはかぎられた攻撃力しか持っていなかった。ペペ・エウコバルが言ったように、「彼らは、カラシニコフ、ロケット推進手榴弾、トヨタのピックアップだけに頼っていた、ここ数日でドローンやヘリコプターをふくむ米軍の兵器を捕獲する前までは」。「中核を除いて、

彼らのゲリラは基本的な軍事訓練しか受けていなかった。タリバンには7万8000人の戦闘員がいて、そのうち6万人が活動していたと推定される。パキスタンにも何人かの戦闘員がいたとはいえ、タリバンに対する国際的支援は大きくなかった。それでも、2021年8月の中旬までには、タリバンの共同創設者ムラー・バラドゥール・アフンド率いるアフガニスタンのイスラム首長国が支配権を握っていた。

タリバンが成功を収めた理由な何か。多くのアナリストは、イスラムに対する彼らの熱烈な信仰を圧倒的に重要な要因とみている。この信仰は、自分たちの土地に対する彼らの愛と深く結合している。いかなる外国勢力もこれまでアフガニスタン征服を維持できなかったのは、このためである。英国はこのことを19世紀半ばに発見した。ソ連は10年間の占領と6万人の将兵の喪失の果てに1989年、アフガンの人びとに打ち負かされたとき、この真実を受け入れた。今アメリカ人は、アフガニスタンが「帝国の墓場」と表現されてきたことがなぜ正しかったのかを知っている。

信仰とは別に、タリバンは地域の首長や草の根コミュニティとの連携を着実に作り上げていく賢明な戦略も進めてきた。こうした連携が、駐留米軍への地域レベルの抵抗の砦となっていた。タリバンは、多数派コミュニティと共鳴するパシュトゥン人主体の集団だが、タジク人やウズベキスタン人、ハザラ人などの少数派民族も取り込もうとした。このネットワークが抵抗運動全体の立ち位置を高めた。

タリバンと米国の支援を受けた政府、アフガン軍とを比較すると、前者と後者に対する国民の見方がいかに異なっているかが理解できるようになる。米国とつながりのある民間人と軍のエリートはいずれも、外国勢力の「操り人形」「傀儡」と見られた。彼らはほとんど信頼されなかった。さ

らに悪いことに、一部のエリートは汚職と権力乱用に現を抜かすことによって、エリート階級の基盤をさらに掘り崩した。アフガン国民に与えられる外国からの援助のかなりの部分が腐敗したエリートによって、彼らの心と心を肥やすために吸い上げられたといわれる。そのような不正行為が、一方ではエリートと彼らの外国支援者との信頼の溝を、他方でアフガン大衆とエリートとの溝を深めた。

また、占領者たちは往々にして、アフガン社会、とりわけ地方の人びとを律する規範や価値観への無神経さをさらけ出した。「テロリスト」搜索のため、米国とNATOの兵士たちがときどき、深夜に農家に押し入るが、その時間帯だと女性はベールをかぶっていないかもしれない。彼らは、（見知らぬ人の前で顔を見せてはならないという）女性の礼儀作法をそれとは知らずに冒とくしているのである。報告の指摘によれば、そのような事例が女性と男性双方を激怒させ、必然的に外国人闖入者に対する怒りを増大させていった。

もし占領とそれに伴う文化への無神経や腐敗などの悲哀に特徴づけられたアフガンの歴史の悲劇的な一章が終わったなら、われわれは新しい章が始まるのを期待できるだろうか。われわれが新しいアフガニスタンの輪郭についてじっくりと思い巡らすことができるようになる前に、軍事的征服と占領はいかなる問題の解決にもならないことを、何度も何度も強調することが重要である。それは、アフガニスタンあるいはそれ以外でテロリズムを根絶できなかった。それは、アフガンの人びとに発展も意味ある進歩ももたらさなかった。多くの場合、占領者自身が自らの議題、覇権的支配と統制という独自の議題を追求しようとして、保証人となり、資金を調達し、訓練を施し、テロリストを防御するのが明らかだというのに、どうしてそれが人びとに恩恵をもたらすことができよう。

われわれすべてが、アフガニスタンの大失敗から学ぶことができる教訓が何かひとつあるとすれば、それは支配と覇権の罪悪とその悲惨な結果である。デモ、集会、メディアの動員などの大衆行動をつうじて、とりわけ米国の人びとはこのメッセージを彼らのエリートたちの頭と心にたたき込むべきだ。他国の政権を力と暴力によって追放するな。他人の土地を占領するな。じつに残念なことに、第二次世界大戦の終結以来、米国のエリートたちはこのことを何度も何度も繰り返してきた、ベトナムで、イラクで、リビアで。彼らはシリアで試みて失敗した。彼らは学ばないらし

い。

こうしたエリートたちの狂気をやめさせることができるのは、民主的に表現された人びとの意志だけである。

*チャンドラ・ウザファー氏はマレーシアの知識人、人権活動家。国際NGO「ジャスト・ワールド」代表。イスラムの立場から文明間の対話活動を進めている。マハティール政権下で国内治安法で逮捕歴がある。

原文は <https://countercurrents.org/2021/08/humiliating-defeat-in-afghanistan/>

2021年8月30日 11:12 <http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202108301112011>

アフガニスタンで今でも活動する「エマージェンシー」

～チャオ！イタリア通信

アフガニスタンの政権がタリバン勢力に奪還され、イタリアも他の国と同様にイタリア人を退避させました。8月27日には、外務大臣デ・マイオ氏がアフガニスタンから帰国希望すべてのイタリア人と4900人のアフガニスタン人をイタリアに避難させたと記者会見で発表しました。イタリアはNATOの一員として、アメリカ同様20年間アフガニスタンに軍を駐留させていました。バイデン大統領が4月にアフガニスタンからの軍撤退を発表すると、イタリア軍も撤退を開始し6月末には完全撤退をしました。

そんなアフガニスタンに今でも滞在するのが、イタリア人が設立した「エマージェンシー」という団体です。イタリア人の外科医ジノ・ストラダ氏とテレサ・サルティ氏の夫妻が1994年に設立し、それ以降今まで戦争によって負傷した人々の治療を行っています。8月22日のニュー

ス番組で、「エマージェンシー」の医師がインタビューを受け、アフガニスタンでの「エマージェンシー」の状況と現状を語りました。

「先週はまだ新政権のスポークスマンがいなくて、私たちは皆心配していましたが、今日、新政権の公衆衛生大臣と連絡が取れて、新政権からのサポートと協力を得ることができました。そのため、私たちは今少し落ち着いています。」

さらに、アフガニスタンの現状は、「現在、危険な場所は空港周辺です。カブールの他の地域は静かで、私たちは今日保健省まで車で行ってきました。その時に、街中は以前よりも人がいなくて、武装したタリバンの検問所をたくさん見ました。状況は穏やかで静かな印象を受けました。とはいえ、夜中には小さな銃撃の音が聞こえたり、空港から弾丸の傷を負った患者が送られてきていま

す。」

その後、カブール空港が爆破された翌日の8月27日には、男性、女性、子ども問わず、爆破によって怪我をした人たちが運ばれてきたと語っています。

この「エマーゼンシー」の創立者であるジーノ・ストラダ氏が8月13日に死去し、ニュース番組でミラノにある本部に多くの人がお悔みに訪れているのを見ました。ジーノ・ストラダ氏は外科医としてパキスタン、エチオピア、ソマリア、ボスニア・ヘルツェゴビナなどで戦争による負傷者を治療してきました。その後、「エマーゼンシー」を設立し、今までで一千万人以上の人々を助けてきました。

その年月の中で、「エマーゼンシー」は、非政府組織として、国際連合グローバルコミュニケ

ーション局の公式パートナーとして認められています。また、2018年からは欧州委員会人道援助・市民保護総局の公式パートナーともなっています。アメリカ、イギリス、スイス、ベルギー、オーストリアだけでなく、実は日本にも事務所を持っている国際的な組織となっています。

ジーノ・ストラダ氏は、常に戦争反対の姿勢を崩さず、歴代のイタリア政府に対して批判をしてきたことでも有名です。晩年、「五つ星運動」からイタリア大統領への候補者として名前をあげられていました。ストラダ氏は世界で初めて心臓移植に成功した南アフリカのクリスチャン・バーナード氏の病院で働いていたこともありました。外科医としての名声より、自ら戦場で負傷した人々を救うという人生を選んだストラダ氏に、純粹で素朴で情熱的なイタリア人の一面を見ることができます。

2021年9月3日 11:10 <http://www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202109031110425>

「ペシャワール会」がアフガニスタンでの事業再開 住民の要望強く、治安は安定と

故・中村哲医師を中心にアフガニスタンで長年、医療活動と農業事業を行ってきた日本のNGO「ペシャワール会」が活動を再開した。会のHPによると、8月15日のタリバンの復権後、活動を一時停止したが、住民からの再開を求める声が多く、医療スタッフも戻り、安全を確認して診療所を8月21日より再開した。農業事業は農作物や用水路周辺での植樹への水やりは地域の住民や作業員の手で継続されており、再開については用水路事業と共に、新政府の基本的な体制（展望）を確認した上で再開するとしている。村上優会長は、ガニ大統領がタリバンの攻勢を前にカブールの無血開城を選択し、「戦闘を回避した」決断を

評価、中村医師が大切にしていた長老会などの自治組織の意向を尊重して事業を継続するとしている。

アフガニスタンの現状と PMS の今
<http://www.peshawar-pms.com/topics/20210825.html>

ペシャワール会 (peshawar-pms.com)